

# 金森修『知識の政治学：〈真理の生産〉はいかにして行われるか』

大 瀧 辰 也

## はじめに

本稿は金森修『知識の政治学：〈真理の生産〉はいかにして行われるか』（せりか書房、2015年。以下「本書」）の書評である。本書は1994～2014年にかけて執筆された、学問論や時事評論など様々な性格の論攷をまとめたものである。

『知識の政治学』という書名に著者は次のような意味を持たせる。まず「知識」というのは主に科学的知識であり、宗教・芸術・政治そのものにかんすることは主要な対象ではない。次に、「政治学」といっても、ものごとの真偽の判定に広義の権力的介入がなされてそれが歪められるという歴史上繰り返されてきた事態を、（派生的に考察される可能性はあっても）少なくとも一次的には想定していないということである。その上で、「知識の政治学」という概念が強調するのは以下の三点である。①「物を追求する際、われわれは必ず概念による援護的補強、概念構築による接近をせざるを得ない……物には、事が絶えず折り重なっている」（p.6）。これを著者は〈物の条理〉とは異なる〈物事の条理〉と呼んで強調する。②科学的知識の真理性や普遍性を保証する〈客観性〉を、誰もが簡単に依拠できる道具としてではなく、一種の獲得目標として考え、獲得過程における認識経路の複雑さを示す。③真理を自明視せず、その現れ方、すなわち〈真理観の複数性〉を問題にする。「それは同時に、『在ること』と『知ること』の直結的な自明性を断ち切ることでもある」（p.7）。したがってそれは、「『結局あれはどうなった？』という結果のみに注意を払い、〈プロセス割愛〉を当然の要請とする性急な眼差しや問いかけからは、最も遠い場所にある」（p.8）。

著者の関心は「私が追及する対象は自然そのものではなく、自然の前に<sup>たなず</sup>佇み、あれこれ思考し、あるいは空想する、人間の精神なのだ」（p.148）という一文に最も明瞭に現れている。また、著者自身「私の議論の神髄は抽象的テーゼの提案というよりは、

具体的事例に則した論証や例証の中にある」（p.6）とも述べている。そのため本稿もまた、「結局この本は何が言いたいのだ？」と「結果のみに注意を払う」ことや、「抽象的なテーゼの提案」ではなく、本書における具体例や著者自身の思考のプロセスをたどることを重視したい。

## 本書の構成・内容

本書は第一部「科学とその外部」、第二部「認識と实在」、第三部「知識と政治」の三部構成である。第一部は、科学者の純粋な好奇心と科学内部の論理により駆動されるという科学観（「科学的認識の自律性」）を疑問視し、特に政治・社会との関連を考えないわけにはいかないことを示す。第二部は、〈知性と物との一致〉、物があるがままに把握したものであるという真理観を批判し、あるものが「真理」と認識されるプロセスを明らかにしていく。第三部は、科学は「良くも悪くも同時代の政治や経済的状況の文脈の中に絡め取られ、そのことによって、その研究内容自体にも変化や歪曲が加えられるほどなのだ」（p.256）という認識のもと、より直接的に政治的な色彩が強くなる。各章から具体例を挙げよう。

第一部第一章で「科学的認識の自律性」がそのまま追跡されると大きな歪みとなってしまう領域として、医学が挙げられる。医師は医療、すなわちより多くの患者の健康回復に貢献するから価値がある。いっぽうで、医療の質を決めるのは、医師の医学的知識の多寡であり、医師は絶えず最新の医学的知識を得るよう努力する。この根本的な逆説を前に、「究極目標の医療行為を良質なものにしようとするあまり、〈目の前の患者〉を犠牲にして、今後の〈不特定多数の可能的患者〉のためになるような知識、つまり医学的知識を蓄積しようとする」（p.22）ようなことが再三起きた。その一例が、アメリカで実際に起きたタスキギー研究である。

1930年代、アメリカ・アラバマ州メイコン群で、

約400人の梅毒患者（全員が黒人で、極めて貧困な小作農だった）が放置され、経過観察の対象にされた。メイコン群の梅毒罹患率は35%と非常に高く、医師たちは罹患調査のち治療に乗り出すが、恐慌のありなどを受けて肝心の基金が撤退してしまう。クラーク医師は、「目の前に大量の患者がいるのに手を付けられないという事態に地団駄を踏んだが、最終報告書を作成する過程で、メイコン群の黒人梅毒患者たちほどの純粹な感染集団は他にを見つけようと思ってそう簡単ではなく、彼らの経過観察をすれば梅毒学の発展にとって有意義ではないか、と考えた」（p.24）。結果、ペニシリンが梅毒に著効を示すことがわかっていった後でも患者はアスピリンを投与されて「治療されている」と思いこみ、40年以上にわたっていわば「あとのくらいもつか」の調査対象とされた。患者を救うためにあるはずの医学が、目の前の患者を犠牲にしながら行われた。それも、犠牲となったのは、他のケースと同様、社会的弱者（精神遅滞の人、孤児、軍人、無知な市民など）であり、医師はその「弱みにつけこんだ」のである。

タスキーギ研究は「いわば極限事例である」が、こうした事例や、別途論じられる遺伝学の発展から著者が主張するのは、科学はすでに社会や文化の中で「〈事実〉だけの位相を超えて、〈価値〉の位相に踏み出した問題群」であり、その「議論は必然的にメタ科学的なものになるはず」であり、「そのとき、『科学の哲学』は重要な機能を果たすだろう」（p.28）ということである。「哲学」とは、批判することすなわち、「物事の成立する論理空間や思考空間の境域の限界に触れようと試みること、当該の思考空間の内部にいる人に……その〈外部〉がありうるのだというのを自覚させること」（pp.72-73）だからだ。

第二部は、われわれの「真理観」や「人間観」に対して、同様の思考を迫る。著者の理論的背景の重要な一人であるフーコー（に依拠した大学論）と、生命倫理の問題をとりあげよう。

第五章「真理生産の法廷・戦場・劇場」では、フーコーの「狂人の家」というテキストから、彼が提示した二つの真理観が読み取られる。一つは、真理というものが既に隠されたものとして存在し、後はそれを見いだせばよいという〈知性と物との一致〉という真理観。そしてもう一つが、「なんらかの状況で不意に生産される」、「勝者の儀式的規定が生み出す効果」（p.115、強調原文）としての真理観、発見

されるのではなく生産されるものとしての真理観である。フーコーが例に挙げているのは中世の神明裁判（被告を試練にかけたり、被告と原告とを関係者の前で決闘させたりする）だが、著者はこの代表的な形象を、裁判や精神病院に見て取る。そこには、「有罪でも無罪でもない或る人物や、正常でも異常でもない或る人物に対して、突然の事故のように生起する〈闇〉の色彩を塗り込めるという運動」（p.119）があるという。

後者の真理観を大学の学問に当てはめるとき、生産的真理観にもとづいて真理・非真理を割り振る〈学問の裁判モデル〉、さらにその戦略性に強く注目するなら〈学問の戦争モデル〉、また同時に〈学問の演劇モデル〉として把握されることがありうる。大学・学問は〈心理追究の場〉というよりも、「真理奪取のための戦略的行動の戦場」、「真理演出のための技巧的練磨が行われる劇場」（p.123）となるわけである。この認識は、こうした理念が現実の大学の姿といかに乖離しているように思われるかという点も含めて、自身も大学人である著者にとって、ナルシズムどころか、「そこで開陳される〈真理〉が、実際にどの存在性格しかもたないものかということの自覚化以外の何ものでもない」（p.125）。

第八章「虚構に照射される生命倫理」は、生命倫理そのものの再考を企てる。生命倫理学とは本来、「医療がもつ多様な問題を医療そのものとは異なる観点から対自化し、時には批判して、医療が抱える倫理的諸問題の解決に資するという基本姿勢をもたず」（p.163）だったが、それは徐々に「医療現場の紛争を予め回避するための一種形式的な手順の総体」（p.163）へと「事務化」している。つまり、〈医療についての何か〉ではなく、〈医療の傍らにある何か〉〈医療に付き従う何か〉になりつつある。無論、実務において事務的な面があることは否定できないが、「他の可能性を考える」という要素がなくなってしまうのだ。

以上の見立てのもと、フィクションによる生命倫理への接近を試みる。まず、ジュディ・バドニッツ『空中スキップ』、スティーヴン・カーナル『Jファクター』、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』で、臓器移植をめぐるもの。そしてスティーヴン・グリーンリーフの『偽りの契り』で、代理母をめぐるものだ。紙幅の都合でここでは前者の臓器移植に絞って説明する。いずれも簡単に説明すると、『空中

スキップ』は、親子関係が一種の「貸し借り」という経済的関係として捉えられ、それが臓器移植という題材によって非現実的なまでに強調されている。臓器移植技術の発達によって臓器が「贈答品」や「生物資源」といった〈品物〉になるとき、「われわれ人間がこれまで築いてきた身体についての文化に、重大な毀損が加えられるのは間違いない」(p.170)という。著者はこの作品に「ブラックユーモア」を見ながらも、それがブラックユーモアでなくなる日が来ないとも限らないという認識を示すのである。

『Jファクター』は、臓器移植が一般化し、移植手術を一私企業が独占している社会を描く。「Jファクター」とは「移植順位指数」のことで、その後高い確率で長く生きられる人ほど高くなる。臓器の調達は、一般人からの自発的提供だけでなく、遺伝子選別によるクローン胚を「製造」することで賄う。クローン胚は特殊な容器の中で成長促進剤によって成長するが、脳に障害が起きて知能指数が低くなるため、閉所恐怖症や臓器摘出の苦痛といった配慮は一切なされない。「それらのクローン個体は純粋な〈臓器工場〉であり、それ以上のものではないのである……」(p.173)。こうした状況の是非そのものを問題にするのではなく、企業が行っていた殺人行為を暴くという形で物語は終わる。

『わたしを離さないで』では、クローン人間たち(それが明らかになるのは最終盤である)が人を思いやり、恋をし、嫉妬し、感情の行き違いに悩むごく普通の人間たちとして描かれ、クローン人間という論争的な主題が想像させる激しい雰囲気を出していない。『Jファクター』ともども、「〈臓器移植汎化社会〉への絶対的拒否というスタンスを、少なくとも明示的には取らないという共通点をもっている」(p.178)のであり、単純な結論を導出しえない。既に多くの移植手術が合法的に行われ、多くの命が助かっているという現実を単純に批判はできないし、「先端医療が本性的にもつ或る種の盲目的な前進強迫」(p.178、強調原文)を問題の本源と考えることもできるだろう。

これらの作品は、現実ではないが、現実と無関係な完全な絵空事でもない〈虚実緋い交ぜ〉である。こうした作品を読むとき、〈おぞましさの感覚〉という程度の曖昧模糊とした、気分的なものが読者を捉える。こうした「違和感や反感の根底には、論理的自覚や形式的並べ立てがしにくいものが待り続

け」(p.185)、それは生命倫理学の新たな豊饒化の機会となるかもしれないのである。

続く第三部は、一章を除いて、東日本大震災および原発事故後に書かれたもので、時事的な論攻が多い。

一つのキーワードは〈公共性〉である。第一三章「〈公共性〉の創出と融解」では、震災・事故後、人々が被災者を助けようと活動する姿に「或る種新たな〈公共性〉の再確認と再構築」(p.302)をみる。一方で、科学者たちは、〈公益〉を体現するはずの集団であるはずが、多くは事故後「放射能は安全だ」と繰り返し、学会集団が出した「三四学会会長声明」は、ポストクの将来や研究所確保、またいわゆる風評被害(簡単に「どれが風評被害か」など弁別できるものではない)と闘うことを宣言するなど、科学技術社会の順調な継続に、もっといえば「グループ益」に、何よりも気遣う態度を見せた。ここに著者は「一方で公共性の新たな創出が確認され、他方で、公共性を体現していたはずの重要領域で、公共性が融解するという光景」(p.305、強調原文)を見て取る。

第一五章「公共性の黄昏」は、「弱者を保護する」といった古典的な社会正義の規範をも含めた公共性が崩壊しつつあるという現状認識のもと、〈普遍性〉〈教養知〉の担い手としての大学と人文知という理念を提示する。〈普遍〉を僭称するのではなく、「自分には想像もできない切り口で、思いもしなかった事実に触れることができる領域があるという直観を抱き続けること」(p.362、強調原文)、また〈普通人の感覚〉が教養知を支えているという自覚をもつことを通じて、「いわばより成熟した〈普遍知〉の構築としての教養に向けた努力が開始されるべきではなからうか」(p.363)ということである。

## 本書という〈物〉と、本書を読むという〈事〉

本書は、原理の導出や演繹的推論ではなく、具体的事例に注目し、著者自身の感覚をも頼りに解釈を行うという記述が多い。生命倫理や大学のあり方については、明確な結論を与えるのではなく、問題の複雑さを浮かび上がらせ、著者自身の違和感を表明し読者にも思考を要求する。その点では、内容の一貫性を重視し、確立された方法論に従い、思考の「寄り道」や個人的な感覚を極力排除して明確な結

論を導く「論文」とは対極にある。しかし、それを「学術性」の名において切り捨てれば、著者の意図を無視することになる。

今日、自然科学に限らず、学術研究のような知的作業が「まったく自律している」と考えることは、善し悪しは別としてもはや不可能である。どのような知的作業であれ、「部分」としての社会的存立条件や「言説」として及ぼす社会的影響を考慮せざるをえない。本書は、知識の内容よりそれが生産される過程（方法ではない）や言説的意味を問題にするものだが、著者自身もまた、「客観的な観察者」として論述するのではなく、自身の感覚を含めた思考の過程や、本書を「言説」として生産する自分の立ち位置に対する自己言及を行う。この構造は読者を同様の運動に巻き込む。つまり、読者は、本書から「自分にとって有用なテーゼ」を受け取るという読み方をするだけでなく、自らの行っている知的作業を、著者が言うような意味で「批判」することを促されるのである。それは、自らの知識の存在性格を見極めることにほかならない。